

## 石井桃子における児童文学と読み

瀧ヶ崎 恵里

本研究は、昭和から平成にかけて活動を行っていた児童文学作家である石井桃子の子どもの本と読書についての思想を明らかにすることを目的とする。本研究の対象である石井桃子（1907－2008）は、埼玉県北浦和郡浦和町に生まれ、1929年から文藝春秋で雑誌編集に携わる。新潮社では、山本有三のもと子ども向け教養書シリーズ「日本少国民文庫」の編集と翻訳に参加し、岩波書店では、少年文学の叢書「岩波少年文庫」、「岩波子どもの本」の編集を担当した。また、『クマのプーさん』、「ピーター・ラビット」シリーズなどの海外児童文学作品の翻訳や、創作作品、子どもの本に関する評論など約156作品を出版してきた。一方、1954年から一年間ロックフェラー財団の研究者として米欧にわたり、海外の児童図書館や出版社を視察し、帰国後には家庭文庫研究会の結成、宮城県の農村部小学校における読み聞かせ、東京都の自宅における家庭文庫の開設など、子どもの読書を推進する活動をおこなってきた。このように、石井桃子は作家、翻訳者、編集者として多くの場面で子どもの本に携わり、文庫活動を実践してきた人物である。これまで、個々の作品論は多くあったが、石井桃子についての人物研究は少ない。

先行研究では、石井桃子の子ども観、児童図書館についての考え、翻訳という視点から研究はされてきたが、石井桃子がどのような読書を想定し、実践しようとしたのかについては明らかにされていない。そこで本研究では、石井桃子の評論を対象として、児童文学を批評し、子どもの読書推進活動に関わるなかで、石井桃子がどのような子ども観や読書観を持ち、子どもの本について考えていたかを明らかにすることを目的とする。

本研究は、石井桃子の図書、雑誌記事、新聞記事などの著作を網羅的に収集し、「子ども」、「本」に関する評論とエッセイを対象として分析する。収集された著作は全体で551件であり、そこから翻訳や創作を除外し、分析対象となる図書や雑誌記事は178件である。石井桃子が理想とする本について、出版形態、作品名、作品の種類、作家名などの関連する語を文脈とともに抽出し、肯定的な評価の理由などについての質的な分析をおこなった。さらに、読書に関連する語を文脈とともに抽出し、子どもにとっての読書の意義など、石井桃子の読書観を明らかにすることを試みた。

その結果、先行研究で指摘されてきた石井桃子の児童文学批評における技術論的な性格も確認できた一方で、マスコミの攻勢が大きくなる時代のなかで、子どもの読書に心の豊かさや想像力といった「人間性」を養うことを重視していたことも指摘できた。また、本研究を通して、勉強や修養のための読書と対置した、自由で楽しみのための読書を理想とするなど、石井桃子の読書観が明らかになった。このような石井桃子の読書観の形成は、欧米への留学やかつら文庫における実践の経験を踏まえたものであったことが指摘できる。

（指導教員 原 淳之）